

教育研究業績書

2020年10月27日

所属：看護学科

資格：講師

氏名：南口 陽子

研究分野	研究内容のキーワード
がん看護	進行がん、最期を迎える場、意思決定、看護介入モデル
学位	最終学歴
博士（看護学）	大阪医科大学大学院看護学研究科博士後期課程修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. 実践過程のリフレクションを通じた課題の明確化	2016年4月1日～2017年3月31日	大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻 高度実践看護師（CNS）コース実践実習において、学生が自らの課題に気づき、主体的に取り組めるよう、実習場面の省察と課題の共有を共に行う関わりを続けた。学生が自らの思考過程を振り返り、再構築するきっかけとなった。
2 作成した教科書、教材		
1. チーム医療論における映像教材の作成	2018年3月	大阪医科大学看護学部看護学科でTAとして、チーム医療論で学生がチーム医療のあり方についてより具体的なイメージを持って検討するために、病棟看護師役として映像教材作成に関わった。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 大阪医科大学看護学部における実習指導	2017年4月1日～2020年3月31日	大阪医科大学看護学部看護学科で実習補助員として「看護実践発達実習」の実習指導を行った。学生が主体性を持って取り組めるように、学生の気づきを促す関わりを続けた。そして、学生が病態生理を理解し、患者の状態に合わせて看護計画を立案し、安全かつ安楽に看護技術を提供をできるようにサポートした。
2. 大阪医科大学看護学部におけるグループワーク補助	2017年4月1日～2020年3月31日	大阪医科大学看護学部看護学科でTAとして、「健康科学概論」において、学生が『健康』の概念について自らの体験を基に理解を深められるよう、グループワークで助言を行った。
3. 大阪大学医学部保健学科における講義	2016年4月1日～現在	大阪大学医学部保健学科看護学専攻「成人終末期看護援助論演習」の緩和ケアにおける症状緩和①リンパ浮腫の講義を担当している。リンパ浮腫に関する病態の理解と根拠に基づいた看護ケアの理解を促すことで、学生が予防指導から症状緩和に至るまでのケアについて理解できるように講義を行っている。
4. 中播磨地域がん診療連携協議会「がん看護事例検討会」でのファシリテータ	2012年4月1日～2015年7月31日	中播磨地域がん診療連携協議会「がん看護事例検討会」において、地域の看護師、訪問看護師を対象とした、がん看護に関わる事例の検討会のファシリテータを担当した。他施設の看護師や訪問看護師と一緒に事例を検討することで、多面的な視点で看護を取り巻く状況を見れるようになったとの評価を得た。
5. 姫路医療センター 緩和ケア研修会のファシリテータ	2011年3月1日～2015年7月15日	姫路医療センターで開催される「がん等の診療に携わる医師等に対する緩和ケア研修会」にファシリテータとして、研修会の運営を補助した。
6. 姫路医療センターにおけるがん看護に関する教育実践	2011年3月1日～2015年7月31日	姫路医療センター看護部の継続教育において「がん看護コース」を設け、知識や技術の習得と実践での活用を目標に、事例の展開までをフォローするプログラムを作成し、実施した。事例展開により講義で得た知識を振り返る機会になり、より深く知識が習得できたとの評価を受けた。
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. がん看護専門看護師	2009年12月	
2. 看護師免許	1996年5月	
3. 保健師免許	1996年5月	
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

研究業績等に関する事項

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. がん患者の症状 まるわかりBOOK	共	2019年7月	照林社	田村和夫, 荒尾晴恵, 菅野かおり編, 南口陽子 担当項目: 腹部一がん患者にみられる「消化器」の 症状「腹痛」(p. 258-261) がん患者が体験する症状 である「腹痛」について、定義、要因、出現形態、 観察ポイント、アセスメントポイント、症状への対 応についてまとめた。
2. がん患者の症状 まるわかりBOOK	共	2019年7月	照林社	田村和夫, 荒尾晴恵, 菅野かおり編, 南口陽子 担当項目: 腹部一がん患者にみられる「消化器」の 症状「吃逆」(p. 262-265), がん患者が体験する症 状である「吃逆」について、定義、要因、出現形態 、観察ポイント、アセスメントポイント、症状への 対応についてまとめた。
3. 看取りケアプラクティス×エビデ ンスー今日から活かせる72のエッ センス	共	2018年2月	南江堂	宮下光令, 林めぐり子編, 南口陽子, 荒尾晴恵 担当項目: 第2部実践! 看取りケア (応用編) 第1 章. 看取りに向けたケア ①からだの変化 1. 食べ られない患者にできるケアは? (p. 129-133), 「食 べられない患者にできるケア」について、根拠のエ ビデンス、アセスメントの仕方、ケアの選択肢、ケ アの手順、関わりのポイントをまとめた。
4. 看取りケアプラクティス×エビデ ンスー今日から活かせる72のエッ センス	共	2018年2月	南江堂	宮下光令, 林めぐり子編, 南口陽子, 荒尾晴恵 担当項目: 第2部実践! 看取りケア (応用編) 第1 章. 看取りに向けたケア ②治療やケア 6. 臨死期 の心電図モニターは必要か? (p. 185-189), 「輪 死期の心電図モニターは必要か」について、根拠のエ ビデンス、アセスメントの仕方、ケアの選択肢、ケ アの手順、関わりのポイントをまとめた。
2 学位論文				
1. 進行がん高齢患者の最期を迎える 場における患者と家族の意思決定 支援モデルの開発	単	2020年3月	大阪医科大学大学院看護 学学研究所	進行がん高齢患者の最期を迎える場における患者と 家族の意思決定支援モデル (以下、意思決定支援モ デル) を開発することを目的として4段階で進めた。 第一部と第二部では、終末期がん患者の最期を迎 える場に対する意思決定に関する文献レビューおよ び概念分析を行い、概念構造を明確化した。第三部 では、進行がん高齢患者が最期を迎える場におけ る患者と家族の意思決定プロセスに関する質的実証 研究を行った。第四部では、第一部から三部まで の研究結果をもとにMcEvoy & Egan (1979)の看護 介入モデルの枠組みを用いて意思決定支援モデルを 作成し、医師と看護師を対象としたグループ・イン タビューにより、適切性と臨床適用可能性を評価し た。その結果、患者と家族が互いの意向を共有し、 最期を迎える場に患者の真の意向を反映できる意 思決定支援モデルとしての適切性が示され、臨床で 適用できるモデルになった。
2. 乳がん患者リンパ浮腫に対するセ ルフリンパドレナージの継続をサ ポートする看護介入プログラム	単	2009年3月	兵庫県立大学大学院看護 学学研究所	リンパ浮腫の症状マネジメントの継続をサポートす る看護介入プログラムを開発し、その効果を明らか にすることを目的とした。対象者は、乳がん術後 リンパ浮腫で病期がⅡ期以上の者とし、4週間の プログラムを提供、上肢の容積量、QOL、上肢の ADL、セルフケア能力を評価した。対象者は3名 で、2名がプログラムを完遂し、上肢の容積量、 QOL、上肢のADL、セルフケア能力が上昇した。 1名はプログラムによる介入が適切でないと判断 したため介入を中止した。症状マネジメントを継 続するために、浮腫の状態をモニタリングし、浮 腫の状態の変化を予測して予防的に対応する、生 活とバランスをとる、動機づけ、が必要であった。 看護の支援は、生活とバランスがとれた方略の提 案、続けていこうとする気持ちを支える共感的な 看護サポートが重要であると考えられた。
3 学術論文				
1. Decision-Making about the Plac e of Death for Cancer Patients : A Concept Analysis (査読付)	単	2020年1月	Asia-Pacific Journal of Oncology Nursing. 2020;7(1):103-112. d oi: 10.4103/apjon.apj on_38_19	終末期がん患者の最期を迎える場の意思決定につ いての概念分析を行った。本概念は「がん患者が、 複数の死を迎える場から、患者自身の望みと家族 への負担を熟考し、重要他者との率直な話し合い を通して、最善を目指した選択をすること」と定 義された。
2. Decision-Making Process for th e Place of Death of Elderly Pa tients with Advanced Cancer an d Their Families (査読付)	共	2019年12月	Open Journal of Nursi ng. 2019;9:1281-1305. doi: 10.4236/ojn.201 9.912093.	進行がん高齢患者が最期を迎える場における患者 と家族の意思決定プロセスに関する質的実証研究 を行った。その結果、進行がん高齢患者の最期 を迎える場における意思決定とは「最期の自己 実現の場の吟味」をコアカテゴリーとするプロ セスであり、患者が最期を迎える場を意思決定 することへの家族の関わりとは、「限界の中 での患者の逝き方への意向の実現化」を コアカテゴリーとするプロセスであることが 明らかとなった。 本人担当部分: 計画立案、データ収集、データ 分析、結果のまとめ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
3. 終末期がん患者の療養の場および死を迎える場へのがん患者と家族の意向に関する文献レビュー（査読付）	単	2018年3月	大阪医科大学看護研究雑誌9巻, p. 3-12.	共同著者：Minamiguchi, Y. and Suzuki, K. 終末期がん患者の療養の場および死を迎える場に対するがん患者と家族の意向を明らかにするために文献レビューを行った。療養の場および死を迎える場に対するがん患者、家族の意向として多かったのは自宅であった。がん患者はそれぞれの場を希望する理由として【尊厳の保持】【家族の介護負担】などを挙げ、家族は【患者の希望の実現】【患者の尊厳の保持】を挙げていた。意思決定支援においては、患者の意向にはヘルスケアシステムや文化的背景が影響していることを考慮する必要がある。
4. 時差の心身への影響 自己アセスメントスケールとアクトグラムによる分析（査読付）	共	2003年3月	兵庫県立看護大学紀要(1340-4814)10巻, p. 83-92	時差が心身に及ぼす影響について基本的データを収集することを目的とし、女性4名に日本からデンマークの渡航と、滞在期間および前後を含めた計30日間の時差症状に関する自己アセスメントスケールの記入と、アクティウォッチで活動量のデータを測定し分析した。4名の時差症状は西行き・東行きとも到着日がもっともスコアが高かった。東行きでは帰国後に疲労感が増大し、内的脱同調を起こしていると推測された。時差に適応するために、特に東行きで、到着後に睡眠時間の調整を行っており、うまくできないと内的脱同調を起こす可能性が示唆された。 本人担当部分：計画立案、データ収集、結果のまとめ
5. 在宅療養者と同居する家族の住まい方に対する認識 ペーパーシミュレーションによる看護学生への調査から（査読付）	共	2002年3月	兵庫県立看護大学紀要(1340-4814)9巻, p. 19-28.	共同著者：若村智子, 宮島朝子, 橋本加奈子, 南口陽子 看護学生270名を対象に、ペーパーシミュレーションを用い、在宅療養者と同居する家族の住まい方に対する看護学生の認識を明らかにして、在宅療養者の住まいに関する教育の基礎的な資料とすることを目的とした。同居することになった祖母の部屋を個室にするか相部屋とするかと、どの位置にするかにより、主な4つのタイプに分かれた。身体機能の低下した祖母の生活や、療養者と同居する家族の生活の変化をある程度イメージできている学生は療養者にとって望ましい部屋を根拠に基づいて選んでいた。 本人担当部分：計画立案、データ収集、データ分析、結果のまとめ
6. 在宅療養者の睡眠時間の類型化（査読付）	共	2002年3月	兵庫県立看護大学紀要(1340-4814)9巻, p. 41-48.	共同著者：南口陽子, 真継和子, 橋本加奈子, 宮島朝子 自宅で療養生活を送る療養者5名を対象に、昼夜の睡眠状況を主観的睡眠評価とActigramを用いた類型化により、療養者の睡眠状況を明らかにすることを目的とした。総睡眠時間（TST）、昼寝（NAP）および理想の睡眠時間から、療養者の睡眠状況を「一致型」（TSTとNAPの和が理想の睡眠時間とほぼ等しい）、「超過型」（TSTとNAPの和が理想の睡眠時間より多い）、「不足型」（TSTとNAPの和が理想の睡眠時間より少ない）3タイプに類型化できた。 本人担当部分：計画立案、結果のまとめ
7. Actigramと睡眠日誌を用いた在宅療養者の睡眠状況の分析 健康高齢者との比較を通して（査読付）	共	2001年3月	兵庫県立看護大学紀要(1340-4814)8巻, p. 1-8.	共同著者：橋本加奈子, 宮島朝子, 南口陽子, 若村智子 自宅で療養生活を送る在宅療養者5名と睡眠障害の訴えない健康な高齢者5名を対象に、Actigramと睡眠日誌を用いて睡眠の状況を明らかにすることを目的に行った。在宅療養者は健康高齢者に比べて睡眠の深度が浅く、入眠が困難なうえ目覚めも悪い状況にあり、睡眠の質が低いことが示唆された。在宅療養者の生活の質を高めていくためには、質のより睡眠を確保し、睡眠・覚醒リズムを整える援助が必要と考えられた。 本人担当部分：計画立案、データ収集、データ分析

その他

1. 学会ゲストスピーカー

2. 学会発表

1. 通院中の乳がん患者の家族への負担感と関連要因	共	2019年6月	第24回日本緩和医療学会学術集会	通院中の乳がん患者が家族に対して抱く負担感と負担感に関連する要因を明らかにすることを目的とし、がん診療連携拠点病院で通院中のがん患者を対象に、自記式質問紙法を実施した。回答の得られた1,981名のうち、乳がん患者453名の回答を抽出した。質問紙は、家族への負担感、対象者の属性、治療歴で構成した。分析は、記述統計および平均値の差の検定を行った。通院中の乳がん患者の約8割が家族への負担感を抱いていた。特に、40代以下の患者の家族への負担感が高く、若年乳がん患者への支援を充実する必要性が示唆された。 本人担当部分：計画立案、データ収集 共同著者：青木美和, 荒尾晴恵, 畠山明子, 南口陽子,
---------------------------	---	---------	------------------	--

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
2. 積極的治療の手立てがないがん患者の療養の場についての意思決定概念分析	共	2019年2月	第33回日本がん看護学会学術集会	辰巳有紀子, 師岡友紀 積極的治療の手立てがないがん患者の療養の場への意思決定についての概念分析を行った。本概念は「がん患者が、複数の死を迎える場から、患者自身の望みと家族への負担を熟考し、重要他者との率直な話し合いを通して、最善を目指した選択をすること」と定義された。 本人担当部分：計画立案、データ収集、データ分析、結果のまとめ 共同著者：南口陽子, 鈴木久美, 府川晃子
3. Awareness of Social Support in Advanced Colorectal Cancer Patients Undergoing Chemotherapy	共	2018年9月	International Conference on Cncer Nursing (ICCN) 2018	薬物治療中の再発・進行大腸がん患者が周囲からどのようなソーシャルサポートを受けているのかを明らかにすることを目的とし、薬物治療を受ける進行・再発大腸がん患者で1コース以上の薬物療法が終了しているものに、治療継続する上での周囲からのソーシャルサポートについて半構成的面接を行った。クリッペンドルフの内容分析法を用いて分析し、カテゴリ化した。対象者は男性8名、女性2名であった。ソーシャルサポートの認識は、【家族や同病者からの支援】と【信頼する医療者からの支援】の2つのカテゴリに集約された。長期の薬物治療中、家族や同病者、医療者の支援が対象者の生活の維持、向上に大きな役割を果たしていた。 本人担当部分：データ収集、データ分析 共同著者：Harue Arao, Miwa Aoki, Akiko Hatakeyama, Yoko Minamiguchi, Kota Asano, Naomi Fujikawa, Ayumi Takao, Yukiko Tatsumi
4. がん診療連携拠点病院におけるがん患者の情報ニーズの世代差による検討	共	2018年6月	第23回日本緩和医療学会学術集会	がんの治療や療養生活を考える際に必要とする情報(情報ニーズ)に関する世代差を把握することを目的とし、A県17か所のがん診療連携拠点病院に治療・通院中のがん患者を対象とした自記式質問紙法による大規模調査において、情報ニーズに関する独自に作成した14項目についてたずね、その回答を分析した。対象者の性別は男性が893名、女性1059名であった。年代別に4群に分けて一元配置分散分析を行った結果、情報ニーズは20-39歳、40-59歳の若年層が高齢者に比べて高い傾向にあった。情報へのニーズは若年層で高い傾向にあり、高齢者は異なるニーズを持っていると考えられた。世代の特徴を踏まえた情報提供が求められる。 本人担当部分：計画立案、データ収集 共同著者：辰巳有紀子, 荒尾晴恵, 南口陽子, 畠山明子, 師岡友紀
5. がん診断後の患者の就労状況の実態と個人属性による差異	共	2018年6月	第23回日本緩和医療学会学術集会	がんと診断を受けた患者の「就労状況や収入の変化の実態」と「個人属性による差異」を明らかにすることを目的とし、A県17か所のがん診療連携拠点病院で治療中のがん患者を対象とした自記式質問紙による大規模調査より診断時に仕事をしていない人を抽出し、がん診断後の就労状況の変化、診断時と現在の月収、個人属性に関し分析した。対象者は男性が433名、女性477名で、がん診断後、退職に至るものは約30%で、年代別では60歳代が最も高かった。診断時と現在の世帯収入(月収)を比較すると、年代別では60歳以上と40歳代に減少したとの回答が多かった。40歳代と60歳以上は退職する割合と収入減となる割合が高いため、特に支援が必要である。 本人担当部分：計画立案、データ収集 共同著者：師岡友紀, 荒尾晴恵, 南口陽子, 畠山明子, 辰巳有紀子
6. 薬物治療をうける再発・進行大腸がん患者のストレスと折り合いをつける力	共	2018年2月	第32回日本がん看護学会学術集会	薬物治療をうける再発・進行大腸がん患者のストレスと折り合いをつける力(Mastery)を明らかにすることを目的とし、外来で薬物治療を受ける進行・再発大腸がん患者で1コース以上の薬物療法が終了しているものに、薬物治療を継続する上でストレスとストレスにどのように折り合いをつけているか、半構成的面接を行った。分析はクリッペンドルフの内容分析法を用いた。対象者は、男性8名、女性2名で、薬物治療をうける再発・進行大腸がん患者のMasteryとして、【拡がり】【受け入れる】【支援の認識】【確かさをもつ】の4つのカテゴリが抽出された。【支援の認識】のうち、医師の支援はストレス折り合いをつける力の核となっていると考えられた。 本人担当部分：データ収集、データ分析 共同著者：荒尾晴恵, 畠山明子, 浅野耕太, 藤川直美, 荒木啓子, 高尾鮎美, 山本瀬奈, 南口陽子
7. 外来化学療法中のがん患者の家族への負担感の実態とその要因	共	2018年2月	第32回日本がん看護学会学術集会	外来化学療法中のがん患者の家族への負担感の実態とその思いに関連する要因を明らかにすることを目的として、A県の17か所のがん診療連携拠点病院で治療中のがん患者を対象とした自記式質問紙法による

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
8. 苦痛のスクリーニングでトリガーされた患者のフォローアップ方法における課題と対策	共	2017年6月	第22回日本緩和医療学会学術集会	<p>大規模調査結果より外来化学療法中のがん患者のデータを抽出し、家族への負担感、PS、年齢、家族役割とその遂行に関する2項目に対する回答について分析を行った。対象者は、男性が246名、女性が345名、家族への負担感について非常にそう思う、ややそう思うと回答した患者は計88.6%であった。また、PSが高い患者および年齢が若い患者が家族への負担感を抱いていた。さらに、独居の患者よりも配偶者または子どもと同居している患者の家族への負担感が高かった。患者と家族の負担感が軽減できるよう調整を行う必要がある。</p> <p>本人担当部分：計画立案、データ収集、結果のまとめ</p> <p>共同著者：青木美和, 荒尾晴恵, 南口陽子, 畠山明子, 師岡友紀, 辰巳有紀子</p> <p>苦痛のスクリーニングでトリガーされた患者のフォローアップ方法における課題と対策を明らかにすることを目的とし、がん診療連携拠点病院緩和ケアチームの医師・看護師・薬剤師51名からなる施設別の7グループによるフォーカス・グループインタビューを行った。トリガー後の課題と対策について課題と対策を抽出、類似性によりカテゴリ化した。課題は8カテゴリに集約され、基準や体制作り、フォローにおける課題とスクリーニングでの対応の限界が挙げられた。対策はトリガーされる問題の質の明確化、主科と緩和ケアチームの協働、多職種での介入が抽出された。スクリーニング目的に即したシートを用いて、既存のリソースやシステムを活用し対応すること、主科とのコミュニケーションが重要であった。</p> <p>本人担当部分：データ分析、結果のまとめ</p> <p>共同著者：南口陽子, 荒尾晴恵, 松本禎久, 木澤義之, 明智龍男, 高尾鮎美, 青木美和, 畠山明子, 森田達也</p>
9. 継続的なセルフケア支援によりQOLを維持した一例	共	2015年6月	第20回日本緩和医療学会学術大会	<p>A氏38歳女性。乳がん術後、4年で遠隔転移が見つかり薬物療法を行ってきたが、軟部組織へ転移が広がり潰瘍化した。介入前は、痛みによりセルフケアができない状態であったため、セルフケア能力を査定してケア代償し、日常生活や社会生活を継続できるように外来での洗浄と疼痛マネジメントを行った。その結果、A氏は自らもケアを継続し、日々の生活を継続することができた。QOLはSF-36v2で評価したが、身体機能や日常役割機能（身体）、体の痛みの低下がある時も、その他の全体的健康観や活力、社会生活機能、日常生活機能（精神）、心の健康に低下がなかった。生活が維持できるように看護師が代償するケアがQOLの維持につながったと考えられる。</p> <p>本人担当部分：計画立案、データ収集、データ分析、結果のまとめ</p> <p>共同著者：南口陽子, 北山奈央子, 南奈保子, 永濱加世子, 和田康雄</p>
10. 乳がん患者リンパ浮腫に対するセルフリンパドレナージの継続をサポートする看護介入プログラム	単	2008年2月	第24回日本がん看護学会学術集会	<p>リンパ浮腫の症状マネジメントの継続をサポートする看護介入プログラムを開発し、その効果を明らかにすることを目的とした。対象者は、乳がん術後リンパ浮腫で病期がⅡ期以上の者とし、4週間のプログラムを提供、上肢の容積量、QOL、上肢のADL、セルフケア能力を評価した。対象者は3名で、2名がプログラムを完遂し、上肢の容積量、QOL、上肢のADL、セルフケア能力が上昇した。1名はプログラムによる介入が適切でないと判断したため介入を中止した。症状マネジメントを継続するために、浮腫の状態をモニタリングし、浮腫の状態の変化に対処する、浮腫の状態の変化を予測して予防的に対応する、生活とバランスをとる、動機づけ、が必要であった。看護の支援は、生活とバランスがとれた方略の提案、続けていこうとする気持ちを支える共感的な看護サポートが重要であると考えられた。</p>
3. 総説				
1. 【がん疼痛マネジメント】（第1章）がん疼痛治療の基本 オピオイドを使いたがらない患者さん、どうしたらいいの？	単	2018年2月	がん看護23巻2号, p. 130-133.	<p>オピオイドを使いたがらない患者への対応について解説した。患者の思いを理解しようとする心を寄せ、なぜオピオイドを使いたくないのか、理由を尋ねる。オピオイドに対する誤解がある場合は、その考えを把握し、誤解を解きほぐしながら、オピオイドに関する説明を行う。副作用を心配している場合は、医療者が一緒にマネジメントすることを保障し、鎮痛効果とバランスのとれた副作用対策を行う。痛みの増悪が病気の進行を意味しており、不安を感じ、オピオイドの使用や増量を躊躇する場合がある。患者の思いを共有し、不安に対する精神的サポートを行う。患者の気がかりや生活の支障、大切にしたいことに焦点を当て、マネジメントの目標を共有する</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3. 総説				
2. 【効果・根拠ある看護ができる どうするといいい?がん終末期ケア 症状緩和ケア&終末期・看取り 期のエビデンス】(Part2)終末期 のさまざまな問題と看取り期のケ ア 終末期になったら中止すべき ケア	単	2018年12月	Expert Nurse35巻1号, p .68-71.	定期的な採血、心電図モニターを使用した継続的な バイタルサインのモニタリング、ルーチンの体位変 換について検討した。採血により患者の苦痛緩和やQ OLの改善に結び付くかを評価し、定期的な採血を控 える。バイタルサインは最後の数日に変化すること が予測されるため、心電図モニターを装着してバイ タルサインを継続的にモニタリングすることには検 討の余地がある。患者と家族のモニター装着につい ての意向を確認しながら、一緒に決めていく過程が 大切である。さらに、体位変換は、病状の悪化やADL の低下に対する患者や家族のつらさや悲しみに関心 を寄せながら、患者にとって安楽な体位やケアに対 する好み、得手体位とその背景にある苦痛症状のア セスメントを共有し、ルーチンで行っていた体位変 換を見直すことが大切である。
3. 患者のセルフケア能力を引き出す がん患者の症状マネジメント(第3回) リンパ浮腫	単	2017年3月	看護技術63巻3号, p. 268 -273.	リンパ浮腫の発症リスクを抱える患者が、リンパ浮 腫予防において、主体的にセルフケアを行う過程を 支援するための看護について解説した。ケアのポイ ントとして、患者がライフスタイルや生活の中で大 切にしていることを維持できるように支援すること 、患者に気がかりがある場合は、先にその気がかり について考えること、予防のための取り組みを認め て、評価を伝えることが重要である。
4. がん化学療法におけるナーシング ・プロブレム PEPカードの有用 性と限界 エビデンスを実践に応 用するとは	共	2008年5月	がん看護13巻4号, p. 474 -481.	Oncology Nursing Society (ONS)のプロジェクトの一 環として作成された“the ONS PEP(Putting Evidenc e into Practice) Resource Cards”(以下PEPカード)は、看護介入のエビデンスを示すものである。看護 実践に活用するためには、患者の状態をアセスメン トし、症状のメカニズムと行う看護介入が効果を発 言するメカニズムを理解したうえで、患者の価値観 や嗜好に合い、安全で安心して行える、もっとも効 果的な介入を選択する必要がある。 共同著者：南口陽子, 方尾志津, 荒尾晴恵
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
6. 研究費の取得状況				
1. 進行がんの高齢患者と家族の療養 の場の決定を支える援助モデルの 作成に関する研究	共	2018年4月1 日～2019年3 月31日	勇美記念財団 2017年 度在宅医療助成（後期 ）	研究代表者
2. 薬物治療をうける進行・再発大腸 がん患者の心理的適応を支援する 看護介入モデルの構築へ	共	2016年4月1 日2018年3月 31日	文部科学省科学研究費 （基盤研究B）	共同担当者
学会及び社会における活動等				
年月日	事項			
1. 2017年4月1日～2019年3月31日	日本がん看護学会査読委員			
2. 2017年4月1日～2019年3月31日	日本がん看護学会代議員			